

## 第3回「憲法フェスタ」参加企画

「2011年を 沖縄の〈自己決定権〉樹立との連帯の年に !!」  
——その企ての意義／妥当性／可能性をめぐる論議の試み

「復帰」から40年——今、沖縄の人々が拓きつつある〈自己決定権〉の樹立という新しい地平。その地平に立つ沖縄の人々と、私たちはいかに呼応するのか？

### ● 日時・会場

11月27日(土)PM1:00~4:00

自治労とやま会館 3F会議室(富山市下新町8-16)

### ● プログラム

i. 目取真 瞬「希望('99)」—— 聴く／読む(\*1)

ii. 目取真 瞬「希望('99)」—— 論議する(\*2)

iii. 沖縄:1995~2010年と「最低の方法」

iv. 沖縄:生成する新しい地平——〈自己決定権〉の樹立(\*3)

v. 私・たちはどうするのか?!

資料.

(\*1) 目取真 俊「コザ希望」

(\*2) 2つの宣言 :「琉球弧の自己決定権の樹立へ」  
:「琉球自治共和国連邦独立宣言」

(\*3) 富山 一郎「テロルを思考すること」(「インパクション」No.119)

## コザ希望

目取真 俊

6時のニュースのトップは、コザの市街地からさほど離れていない森の中で、行方不明になっていた米兵の幼児が死体で発見されたというものだった。食堂にいた数名の客と店員の目がテレビに釘づけになる。遺体には首を絞められた跡があり、県警では殺人と死体遺棄で犯人の行方を追っている。決まり文句の後に、街の音が紹介される。怖くて、子供を歩かされないですよ。沖縄も恐ろしくなったね……。画面に映った50前後の女を目にして、「あい、フミ姉さんが映ってるよ、ほら、小母さんほらテレビ、テレビ」と店の女がはしゃぎ声を上げる。厨房から汗を拭きながら太った女が出てきた時には画面は変わっていて、二人は不満の声を漏らす。取材記者が、新聞社に届いた犯行声明についてコメントしている。手元に置いた夕刊の一面を見る。声明文の写真が載っている。今オキナワに必要なのは、数千人のデモでもなければ、数万人の集会でもなく、一人のアメリカ人の幼児の死なのだ。威嚇的な鋭角と直線の赤い文字。隣のテーブルで沖縄そばをすすっているタクシーの運転手が、早く捕まえて死刑にしろよ、とつぶやく。ただでさえ儲からんのに、これで観光客がよけいに来なくなったらどうするか。店の女が相槌を打つ。ヘリから撮影された森とコザ市街の映像の後に、県知事や日米の政府高官のコメントが続く。いたいけな幼児を狙った犯行への怒りと憎しみ。笑いをこらえてカレーライスを口に運ぶ。高ぶった口調の裏にある憔悴や戸惑いを隠せはしない。奴らは従順で腑抜けな沖縄人がこういう手を使うとは、考えたこともなかったのだ。反戦だの反基地だの言ったところで、せいぜいが集会を開き、お行儀のいいデモをやってお茶を濁すだけのおとなしい民族。左翼や過激派といったところで実害のないゲリラをやるのがせいぜいで、要人のテロや誘拐をやるわけでもなければ、銃で武装するわけでもない。軍用地料だの補助金だの基地がひり落とす糞のような金に群がる蛆虫のような沖縄人。平和を愛する癒しの島。反吐が出る。

店を出て、胡屋十字路の歩道橋を渡り、空港通りを歩く。外出禁止令が出されているのだろう。通りを私服で歩く米兵の姿はない。迷彩色のジープが走り過ぎる。赤色灯を回転させたパトカーが嘉手納基地のゲート前に停まっている。鳳凰木の並木の上に浮かぶハブの牙のような白い月。最低の方法だけが有効なのだ。立ち止まってつぶやく。通りの向こうで、テレビカメラが回っている。横道に入ると、歩調が速くならないように注意しながらアパートに戻った。

冷蔵庫からウーロン茶の缶を取って一気に飲み干す。机に座り、用意してあった封筒に新聞社の住所を書く。引き出しから取り出した小さなビニール袋には麦藁色の毛髪が入っている。スーパーの駐車場に停まった車の、後部座席に寝ていた子どもの横顔が目に見えぬ。まだ二十歳くらいにしか見えない白人の女は何度も声をかけるが、なかなか起きない。しまいには一人でカートを押してスーパーに入った。飲んでいたウーロン茶の缶をゴミ箱に捨て、駐車場を横切る。エアコンをつけてアイドリングにしていた車に乗り込み、県道

に出ると十五分ほど北上した。市営団地の北側にある森に入る。荒れた道に車が揺れ出すまで、子供は目を覚まさなかった。後ろから聞こえた泣き声に停車し、振り向くと、起き上がってドアを開けようとしている。男の子で三歳くらいかと思った。すぐに車を止め、後部座席に回ると泣き喚く小さな体を抱きすくめる。背後から首を絞め上げると、喉の奥で何かが潰れ、汚物が腕を汚す。子供の服で拭き、運転を再開して、森の奥にある養豚場の廃舎の陰に車を止めた。ハンカチでハンドルやドアノブを拭く。後部トランクに子供を移し、麦藁色の髪の毛を指に巻き付けてむしり取り、ハンカチに包んだ。トランクを閉めた時、薄曇りの空から日が差した。汗まみれの全身に鳥肌が立つ。歩いて森を抜ける途中、車の鍵を埋め、国道に出てタクシーを二度乗り換えてアパートに戻った。

エアコンのききが悪く、車の窓を開けても汗が流れ続ける。毛髪の入った封筒を、那覇まで行って投函した。帰途、宜野湾市の海浜公園に寄る。三名の米兵が少女を強姦した事件に、八万余の人が集まりながら何一つできなかった茶番が遠い昔のことに思える。あの日会場の隅で思ったことをやっと実行できた。後悔も感慨もなかった。ある時突然、不安に怯え続けた小さな生物の体液が毒に変わるように、自分の行為はこの島にとって自然であり、必然なのだ、と思った。広場の真ん中までくると、ペットボトルの液体を上着やズボンにかける。車から抜き取ったガソリンのにおいが目を刺激する。ポケットから取り出した百円ライターの石を擦る。

闇の中で燃え上がり、歩き、倒れた火に、走ってきた中学生のグループが歓声を上げ、煙を噴いている黒い塊を交互に蹴った。

## 琉球弧の自己決定権の樹立へ ナラン！！日米の軍事植民地

亜熱帯の風を揺らし、百年の従属の根を食い破るように沖縄が動きはじめた。そのシグナルはもはや天皇の国家とアメリカの傘の下の日和見で曇った感度ではキャッチできない。

戦後65年、朝鮮戦争60年、日米安保改定50年、そしてコザ暴動40年、沖縄と日本の戦後史を決定づけた歴史的な節目の年に当たる2010年。戦後日本に初めて政権交代が実現し、これまでの戦後国家を拘束していたさまざまな呪縛を解除していくことが期待された。しかし、この間の普天間基地の「移設＝新基地建設」をめぐる政府中枢の言動と自己保身的な国民意識の動向から見えてきたことは、日本の国家と国民がいかにアメリカを内面化していたのか、ということである。沖縄のわれわれが目撃したのは、政治力学の変更ぐらいでは日本政府と日本国民そのものの沖縄認識は変わらない、という動かしようもない事実であった。

## 日本の枠組みを越え、沖縄自らの地図を

こうした日本国家と国民の沖縄観は、歴史化されたものでありかつ構造的なものである。そして普天間「移設＝新基地建設」をめぐる露呈した国家としての日本の内向の共犯／共同性は、またしても沖縄の主張を封じ込め、排除しようとしている。

だが、沖縄の意思を排除しながら従属化させるやり方は何時までも通用するわけではない。いまや抗議や怒りの声が、地域や階層や組織を横断し、島ぐるみの様相さえ呈している。その怒りと異議申し立ては、沖縄民衆の歴史体験の深みから立ちのぼってくるものであり、日本の戦後の枠組みを決定づけていた日米安保そのものの前提を問い直すところまで風向きを変えようとしている。

この怒り、この流れ、この想像力をこれまでのような政治力学に回収するのではなく、新たなる実践の地平に解き放っていくための眼と声が求められている。問われているのは、沖縄自身の思想と実践の射程である。アメリカの影の下にドメスティックな安全と安心を享受し、アジアからの視線を封印した日本の〈外〉を想像し創造することができるのかどうかである。

答えははっきりしている。沖縄の地に立ち、沖縄の知によって生産した沖縄自らの意思を保障する政治的・文化的空間を、誰の手にもゆだねることなく、自らの知恵と力によって創造していくことである。沖縄の自立と自己決定権への意思を、2010年という転換期の時代の風景の先端に描き込むことである。われわれ自身の地図を製作しなければならない。

## 脱冷戦・脱植民地化から琉球共和社会連邦へ

沖縄戦の死者たちの遺念に思いを寄せること、日米合作の軍事植民地的な〈例外状態〉で精神を損ない、命を落とした無念の声を想像力をもって聴き取ること、そして歴史の正典が周辺化し封印した、アジアの半島と群島の脱冷戦、脱植民地化のタタカイに繋がること。

われわれはみなガマから生まれたイノチであり〈艦砲ヲ喰エヌクサー〉である。  
そして、われわれは〈復帰ヲ喰エヌクサー〉である。

沖縄が、どこでもない沖縄に還ること、主体を發明し未聞の声を情況に打ち立てよう！

日本の海外県としての位置からアジアの脱植民地化の共闘者となろう！

世界のイメージを変えること、内発を力にすること。

還我琉球、原点有理、そして沖縄の自己決定権樹立と琉球共和社会連邦へ！

われわれは、2010年が沖縄の決定的な変革の年であることを、震える神経でキャッチする。われわれは琉球弧の自己決定権の〈構成的力動〉の創発へむけて、琉球弧を横断する有志の連合体である。ひとりひとりが自立した表現者であり、実践者である。

ヒヤミカチウキリ！

大和(やまと)世(ゆ)ぬ幻想(ゆくし) 復(たち)帰(むど)る未来(さち)や  
我(わ)した島(しま)琉球(りゅうきゅう) 世(ゆ)や直(のう)れ

ナラン！日米の軍事植民地 琉球弧（奄美・沖縄）の分断をゆるすな！  
沖縄への構造的差別をゆるすな！ 米軍基地はヤマトへ！  
日本軍・自衛隊は沖縄からゴーホーム！

「琉球弧の自己決定権の樹立へ」有志連合

## 琉球自治共和国連邦独立宣言

2010年、われわれは「琉球自治共和国連邦」として独立を宣言する。現在、日本国土の0.6%しかない沖縄県は米軍基地の74%を押し付けられている。これは明らかな差別である。

2009年に民主党党首・鳩山由紀夫氏は「最低でも県外」に基地を移設すると琉球人の前で約束した。政権交代して日本国総理大臣になったが、その約束は本年5月の日米合意で、紙屑のように破り捨てられ、辺野古への新基地建設が決められた。

さらに琉球文化圏の徳之島に米軍訓練を移動しようとしている。日本政府は、琉球弧全体を米国に生贄の羊として差し出した。

日本政府は自国民である琉球人の生命や平和な生活を切り捨て、米国との同盟関係を選んだのだ。

琉球人は1972年の祖国復帰前から基地の撤去を叫び続けてきたが、今なお米軍基地は琉球人の眼前にある。基地があることによる事件・事故は止むことがない。

日本国民にとって米軍の基地問題とは何か？琉球人を犠牲にして、すべての日本人は「日本国の平和と繁栄」を正当化できるのか？

われわれの意思や民族としての生きる権利を無視して米軍基地を押し付けることはできない。いまだに米国から自立することができない日本国の配下にあるわれわれ琉球人は、

絶えず戦争の脅威におびえ続け、平和に暮らすことができない。

琉球人はいま、日本国から独立を宣言する。奄美諸島、沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島からなる琉球弧の島々は各々が対等な立場で自治共和国連邦を構成する。

琉球は三山時代（14C半ば～15C初期）を経て、1429年に琉球王国として統一された。その後1609年、薩摩藩は琉球王国に侵略し、奄美諸島を直轄領とし、琉球王国を間接支配下に置いた。

1850年代半ばに琉球王国は米・蘭・仏と修交条約を結んだ。1872年に日本国は琉球王国を一方的に自国の「琉球藩」と位置づけ、自らの命令に従わなかったという理由で1879年、「琉球処分」を行い、「琉球王国」を日本国に併合した。

その後、琉球王国の支配者たちは清国に亡命して独立闘争を展開した。日本国に属した期間は1879年から1945年、1972年から2010年までのわずか104年間にすぎない。琉球が独立国であった期間の方がはるかに長いのである。

太平洋の小さな島嶼国をみると、わずか数万の人口にすぎない島々が独立し国連に加盟している。これらの島嶼国は、民族の自立と自存を守るために、一人ひとりの島民が「自治的自覚」を持って独立の道を選んだのである。国際法でも「人民の自己決定権」が保障されている。琉球も日本国から独立できるのは言うまでもない。

これからも日本政府は、「振興開発」という名目で琉球人を金（カネ）で支配し、辺野古をはじめとする基地建設を進めていくだろう。

長い歴史と文化、そして豊かな自然を有するわが琉球弧は、民族としての誇り、平和な生活、豊かで美しい自然をカネで売り渡すことは決してしない。平和運動の大先達・阿波根昌鴻は「土地は万年、金は一年」と叫び、米軍と闘った。

われわれ琉球人は自らの土地をこれ以上、米軍基地として使わせないために、日本国から独立することを宣言する。そして独立とともに米軍基地を日本国にお返しする。

2010年6月23日 慰霊の日に  
呼びかけ人 松島 泰勝  
石垣 金星

賛同人 2010年6月22日現在

前利潔（沖永良部島）	上原成信（一坪反戦関東ブロック）
上勢頭芳徳（竹富島）	石坂蔵之助（沖縄市泡瀬）
内間豊（久高島）	喜久里康子（沖縄市民情報センター）
新元博文（奄美大島宇検村）	当真嗣清（琉球弧の先住民族会）
高良勉（沖縄島南風原）	島袋倫（ウチナーグチ振興研究家）
謝花悦子（わびあいの里）	アイヌ・ラマツト実行委員会
平恒次（イリノイ大学名誉教授）	藤原良雄（藤原書店）
久岡学（奄美大島龍郷町）	西川潤（早稲田大学）
森本眞一郎（1609年を考える奄美三七の会）	上村英明（市民外交センター）
山田隆文（鹿児島在住奄美大島出身者）	竹尾茂樹（明治学院大学）
照屋みどり（沖縄島豊見城）	佐藤幸男（富山大学）
本村紀夫（宮古島）	大林稔（龍谷大学）
渡名喜守太（琉球弧の先住民族会）	西浜檜和（沖縄通信）
島袋マカト陽子（琉球センター・どぅたっち）	中村尚司（龍谷大学）
勝方＝稲福恵子（早稲田大学）	崔真碩（広島大学）
	手島武雅（先住民族政策研究者）
	日比野純一（FMわいわい）

## こ 案 内

### 「オルタセミナー・2010年度」 『日本』の構成的解体を模索する——この後の予定

「オルタセミナー・2010年度」では、「プロジェクトA:いくつもの『日本』へ」と、「プロジェクトB:いくつもの『民』から」の2つのプロジェクトを軸に、この世界のありかたを壊すことが、同時に、「今のようではない」世界を創り出すことでもある、ということがどのように可能であるかをめぐる論議を進めます。ぜひ、ご参加下さい。

#### オルタセミナー:2010年度 「日本」の構成的解体を模索する

- 12月19日(日) PM1:00 ~ PM4:00 サンフォルテ 306 号室  
プロジェクトB: いくつもの「民」から  
「隙間の『当事者』にとってベーシックインカムとは何である／ありうるのか」  
テキスト:小泉義之「残余から隙間へ」(「現代思想」2010年6月号)  
古暮修三「現代のディオゲネスたちへ」(「週刊読書人」2010年7月2日号)
- 2011年1月23日(日) PM1:00 ~ PM4:00 サンフォルテ 306 号室  
プロジェクトA: いくつもの「日本」へ  
「沖縄における模索の軌跡(そのiii)」  
テキスト:屋嘉比収「『反復帰論』をいかに接木するか」(「情況」08年10月号)
- 2月20日(日) PM1:00 ~ PM4:00 サンフォルテ 306 号室  
プロジェクトA: いくつもの「民」から  
「『まだ見ぬわれわれ』への道筋を探る」  
テキスト:杉田俊介「フリーターにとって『自由』とは何か I-1」(05年人文書院)

主催: 生・労働・運動ネット

TEL:076-441-7843

〒930-0009 富山市神通町3-5-3

FAX:076-444-6093